

朔日に紅く咲く

咲 恵水

登場人物

七織 (ななお)

菊江 (きくえ)

慎治 (しんじ・じんち)

佐伯 (さえき)

七月三十一日の夜、ワタナベ家の娘、七瀬の四十九日の法事の後。

1

ワタナベ家の小さな居間。壁があり、窓から奥が少し見える。奥には台所があるらしい。手前には小さなテーブル、座布団がある。居間を中心に、広間・二階・玄関へ続く廊下と、風呂場・離れ・勝手口につながる廊下があるらしい。

夜になる。

七織、床に寝転んでいる。黒いワンピースを着ていて、動かない。テーブルの上に数珠、床に丸まったストッキングが見える。

菊江、広間の方角から部屋に入ってくる。喪服の上に白いエプロンをつけている。汚れた大皿を持っている。しばらくの間、部屋から出たり、部屋に入ったりする。ビールグラス、湯呑み、大皿、小皿、おにぎりなどを奥に持って行き、片付けている。奥から食器を洗う音、皿を重ねる音が聞こえる。

菊江、鼻歌を歌い出す。声が小さく、ことばが聞き取れない。

菊江 …… 嘆くウゲイスよ…夜来香… …… 嘆くウゲイスよ…夜来香…この夜来香…夜来香…花…夜来香恋の花…あああ…。

菊江、徐々に声が大きくなるが、ところどころ歌詞がわからない。「夜来香」であることがわかる。

七織 (寝たままで) うるさいな。

菊江 ああ、起きてはったんですか。(と、奥から急いで出てくる)

七織 かい声やなあ。

菊江 すんませんな。寝てください。あ、もう、ここやったらあれやから、奥でも行ってください。だいたい片付けましたから。

七織 みんな帰ったん。

菊江 はい。

七織 やつとか。

菊江 ありがたいやないですか、よう残ってくれてねえ。

七織 宴会、目当てやろ。

菊江 あれ、金龍さんに頼んで、よかったですわ。私もね、作ってたんですよ。作ってたんですよ。足りんかなあ思うて。みんなよう食べてくれて、ほんまよかったです。あ、天ぷら、意外とおいしかったですねえ。

七織 普通やろ。

菊江 うち、天ぷら下手やから。もう最近全然しませんねん。お酒もビールも、足りてたし、ねえ。

七織 あれ、肉とか、出してええん。

菊江 こうごりねえ、おいしかったでしょ。

七織 食べてない。

菊江 食べてください。あれ、先週から、ヤマモト畜産に、仕込んでいてもうたんです。アキレスのどこ、なかなか手に入れへんから。ツモリから直接持ってもうたんです。

七織 普通は、精進料理で、肉あかんのちゃうの、

菊江 そんな関係ありません。肉でも何でも、来てくれた人に、喜んでもうたらええんです。

七織 あ、そう。

菊江 七瀬様も、それが一番、喜んでくれますわ。あ、今日も、朝は雨降つとつたのに、昼からよう晴れたし。七瀬様が喜んでる証拠ですわ。

七織 たまたまや。

菊江 そいから、(指を折りながら) スマコ様、ハマコ様、チカエ様、ナガコ様、コミエ様、ナミコ様も。ヒメ様が、ちゃんと見てくださるおかげですよ。(と、拝む)

七織 奥で、どこ。布団出してええの。

菊江 向こうの。

七織 広間に寝んの。

菊江 二階ですよ。七織様の部屋、昔のまんまにしています。

七織 いらんわ、気持ち悪い。

菊江 気持ち悪い、なんですか。

七織 いっ死んでもおかしくないやん。

菊江 ナミ様も、アキツ様も、まだまだお元気ですよ。代々のヒメ様が守ってくれてはります。(指を折りながら)スマコ様、ハマコ様、チカエ様、ナガコ様、コミエ様、ナミコ様。ご先祖様をながしるにするんは、七織様でも。七織 様で、やめてくれる。

菊江 え。

七織 ナナオで、ええて。(と、数珠に触って珠を数え始める)

菊江 昔から、七織様やないですか。

七織 今どき、そういう呼び方、どうなん。

菊江 うちら村のもんは、違います。七織様、七瀬様、ナミ様、アキツ様。(指を折りながら)スマコ様、ハマコ様、チカエ様、ナガコ様、コミエ様。ヒメ様はヒメ様ゆうて、何が悪いんですか。

七織 ナミコさんは。

菊江 え。

七織 ナミコさん、忘れてたで。かわいそー。

菊江 もちろん、ナミコ様ですよ。

七織 菊江さん、いっつもそこで止まるけど。ナミコさんより、前の人は、どうなってるの。

菊江 いてはりますよ。

七織 だいたい、ナミとナミコで、ほとんどおんなじやし。どっちがどっつか、紛らわしい。

菊江 ちよつとややこしいですけどね。昔の名前やから。

七織 ここで寝るわ。(と、寝転ぶ)

菊江 あきません、こんなところで。

七織 ええて。昔も、ここでよう寝たやん。(珠を数えながら、足を組んだり伸ばしたりしている)ホットケーキ、ちようだいーて。

菊江 ああ、ねえ。ホットケーキは、できあいのんですよ。(と、座布団を片付けながら)

七織 あ、そう。

菊江 思い出しますわ。七瀬様と二人、クラブから帰ってきて。うちが作ったおやつ食べて。寝たらあかん言うのに、いっつもここで、寝転んで。なかなかゆうこと、聞いてくれへんかったですねえ。

七織 カラメル焦げてる、プリンも、我慢して食べたやん。

菊江 あれは、たまたま失敗したんです。

七織 味はまあまあやったけど。今日、ホットケーキ出したらよかったのに。

菊江 (涙ぐみながら) おいしかったら、何でもええんです。

七織 布団、どこあんの。(と、菊江の顔を見る)

菊江 (涙をぬぐっている)

七織 何。

菊江 すんません。我慢してたんですけど。七瀬様が、急にこんななつて。ほんま、どうしようか思うてたから。七織様が戻ってくればって。ほんま嬉しいです。

七織 菊江さんのためやないけど。

菊江 今日は、ほんまびつくりしましたわ。

七織 仕事、シフト入ってたから。なかなか来られへんかったん。

菊江 ええんです。今日は、バタバタしてたから。もうゆっくりしてください。

七織 してるけど。

菊江 あ、そろそろ。お風呂でも入って。沸いてますから。

七織 暑いのに、シャワーでええわ。

菊江 浴衣は七瀬様のんがありますから。バスタオルは風呂場にあります。

七織 わかりました。

菊江 明日も、早いから、さっさとせんと。

七織 アタシ、明日、帰るから。(と、起き上がり、数珠をテーブルに置く)

七織 え。

菊江 仕事あるし。

七織 明日は八朔(はっさく)ですよ。

菊江 ふーん。(と、奥に入る)

七織 あ、おかず、残ってます。こうごりも、まだようけ。

七織 いらんて。(と、おかきを持ってくる。菊江がまとめた座布団を広げて、おかきを食べ始める)

菊江 (お茶を入れながら) ……せつかく帰ってきたのに。もつとゆっくり。

七織 今日泊まんねんから、ええやん。

菊江 今年は特別ですよお。

七織 何が。

菊江 百年に一回の大祭です。村のもん、総出でやってますわ。

七織 どこが総出なん。商店街、どこも準備してなかったやん。

菊江 八朔は、前の日の、夜から夜中にかけて。昔は、朝までずーっと、み

んなで準備してたんです。(と、お茶を七織の前に置く)

七織 仕事やから、しゃーないやろ。

菊江 仕事は。七織様、今、何やってはるんですか。

七織 キヤバクラ。

菊江 ええ。

七織 悪い。

菊江 七織様がそんな仕事してはるんですか。

七織 そんなで、どんな想像してんの。

菊江 どんなんて。

七織 ピンサロとかちやうで。普通のクラブ。スナック、みたいなもんや。

お触りもないし。

菊江 やっぱりそんなん、あるんですか。

七織 だから、ないって。菊江さんが考えてるようなんと、ちやう。

菊江 うちは、そんなお店、行ったことないし、わかりませんけどねえ。

七織 このへんも、ハナゾノのほうに、できとったやん。

菊江 そうなんです。エチゼン屋の奥さんで、覚えてはります。

七織 八百屋のおばちゃんやろ。

菊江 今、スーパーなってるんですわ。商店街も、ようけつぶれてますけどね。

七織 介護とか薬局ばっかりなってきたな。

菊江 そうです。そやけど、あそこは、旦那も商売うまいから。店、夜中までやってるんです。

七織 便利やん。

菊江 便利やけど、店員があかんです。言葉もようわからんで、レジも間違えるんです。こないだ、一万円払うたのに、千円で、レジ打って。ほんま困りますわ。

七織 そのおばちゃんが何。

菊江 あ、そいで。奥さんが、ハナゾノに飲み屋、出したんですよ。それが、いやらしい店でねえ。

七織 キヤバクラ。

菊江 どんなんか知りませんけど。店の、若い女の子に、外でお客さんと食事させて。そいでお客さん呼んでるらしいんですわ。

七織 同伴やろ、普通やん。(と、脱ぎっぱなしで丸まっていたストッキングを、まっすぐに伸ばす)

菊江 それだけちやいます。女の子にお金やってホテル行ってる。村であ

ちこち、噂なってるんです。

七織 お互い了解済みやったら、ええんちやうの。(と、伸ばしたストッキングを、端からきれいに丸めていく)

菊江 お金出す、おっさんも悪いけど。女の子も女の子や。昼間からこんな短いスカート履いて。下着かと思うような着て。あほが駅のへんろろろするから、雰囲気悪いですがな。

七織 菊江さんも、そういう格好やってみたら。

菊江 なんて、うちが。あんなん、できませんわ。

七織 あんなんで、何なん。

菊江 あんなんは、あんなんです。七織様はそんなことしてはりませんよねえ。

七織 してない。(ストッキングを丸め終わり、勝手口のほうに放り投げる)

菊江 そんななったら。うち、ナミ様にどう言うたら。七瀬様にも顔向けでけへん。

七織 サービスに対する報酬は、あたりまえやろ。金もらって何が悪いんな。

菊江 それは、あばずれの考え方ですわ。こわいこわい。

七織 店から外出たら、自由やから。その女の子と客、恋愛関係でやってるかもしれんで。

菊江 それ、言い逃れやないですか。

七織 仕事に、言い逃れはつきもんやろが。

菊江 七織様もそんなん。え。

七織 してない言うてるやろ。だいたい、トウキョウは、システムきっちりしてるから。なあなあになれへん。菊江さんみたいな、うるさいおばはんもおらんし。自由や。

菊江 うちかて、わかりますよ。女一人でやっていくんは、たいへんですわ。

七織 そやけど、やっていいことと悪いことがあります。

七織 別にたいへんちやうけど。

七織 ……

菊江 ナミ様も、ずっと心配してはりました。

七織 頭おかしいのに、心配できんの。

菊江 子供のこと、心配せん親がどこにいてますか。

七織 ここにおるやん。

菊江 十年も。ナミ様、七瀬様は、七織様のこと待ってたんですよ。

七織 何それ。七瀬が死んだら、今度はアタシなん。

間。

菊江 ああ、お膳。

七織 え。

菊江 ナミ様、アキツ様のお膳、持って行かんと。法事に気いとられて、忘れてました。あかん、あかん、待ってはりますわ。

七織 アキツさん、何歳。

菊江 七十三、今年七十四かなあ。

七織 病院入れたらええやん。意識ないねんから。

菊江 ナミ様はまだありますよ。昨日も、ご飯のとき、何か嬉しそうに笑ってましたわ。あれはまだ大丈夫です。

七織 菊江さんが、しんどいだけやろ。

菊江 病院は、よけい早死にしますわ。うちのお母ちゃんも、おばあちゃんも、ずっとお仕えして、お世話になってたんです。うちかて、最後までワタナベにお仕えします。

七織 えらいなあ。

菊江 七織様も、強情はらんと。…明日、川でケガレ流したらええですわ。ちようどええです、きれいにしはって。アキツ様、ナミ様も、村のもんも、みんな楽しみにしてますわ。

七織 誰もしてないで。

菊江 みんなで、楽しいしたらねえ。

七織 菊江さんだけや、はりきってんの。

菊江 うち、今年も踊りますから。

七織 まだやってんの。

菊江 やってます。お母ちゃんに比べたら、うちヘタやけど。

七織 もうやめようや。

菊江 ええ。

七織 七瀬、死んでも。まだそんなこと言うん。…あんた、一番ようわかっているやろ。

菊江 (七織の顔をじっと見る)

七織 なんやねん。

菊江 ほんま、こわいぐらい、七瀬様によく似てる。あ、七瀬様が七織様に似てはったんか。

七織 似てない。

菊江 そっくりですわ。

七織 似てない言うてるやろ。

菊江 もうちよっと早う戻ってくればしたら。お二人揃って、イタチ川に行けたのにねえ。

菊江、お膳を持って部屋から出ていこうとする。

慎治、勝手口のほうから、部屋に入ってくる。喪服を着ている。傘を三本、持っている。

菊江 ああ、すんませんな。

慎治 (お辞儀をする)

菊江 そのへんに。たった、こんだけ。

慎治 (首を横に振る)

菊江 そうやなあ、まだあるわな。

慎治 (頷く)

菊江 ほんな回ってきて、お願いしますわ。後で、全部磨くから。ああ、慎治さんもこれ。残りもんやけど、よかったら食べてなあ。

慎治 (頷く)

菊江 離れも、用意してます。布団も敷いてるから、いつでも休んでください。

慎治 (頭を下げる)

菊江、お膳を持って、部屋から出ていく。

慎治、七織にお辞儀をして、部屋から出ていこうとする。

七織 あんた、まだここにおったん。

慎治 ……。

七織 何してんの。仕事あんの。

慎治 ……。

七織 誰もおれへんねんから、しゃべったら。

慎治 ……。

七織 何か言いや。

慎治 ……。

七織 あほなこと、やめゆうてんねん。

七織、慎治の前に立ち、頬をつねる。

七織 痛い。

慎治 ……。

七織 痛い。(と、強くつねる) しゃべらんかったら、ずっとこのまんまやで。

慎治 ……。

七織 何か言いや。ジンチ。

慎治 (七織の手に触れる)

七織 あかん。アタシがいいって言うまでや。

慎治 ……。

七織、しばらくつねっているが、そのうち手を離す。

慎治、お辞儀をして、勝手口から出ていく。

七織、そばにある傘を慎治の立ち去った跡に、投げつける。一本取っては床に投げつけ、傘をすべて投げつけていく。

七織、風呂場のほうに部屋から出ていく。

2

間。

佐伯、勝手口のほうから入ってくる。うす汚れたシャツを着て、汚い鞆を持っている。様子を見ながら、途中にある傘を拾いながら、びくびくしながら進んでいる。歩き方がおかしい。様子を伺い、部屋に入る。テーブルの上に、お茶とおかきを見つけて、おかきを口に入れる。たまに、お茶を飲む。傘に興味を示して手に取り、たわむれる。思うままにならない傘に怒ったり、遊んだりしている。まるで、不自由に踊っているかのように見える。

菊江、部屋に入ってくる。

菊江 ああつ。

佐伯 あ、どうも。

菊江 なんや、あんた。

佐伯 私、怪しいもんちやいます。

菊江 なに勝手に入ってるんねん。誰や、ああ。

佐伯 すんませんな。私、佐伯、言います。怪しいもんちやいます。

菊江 ……あんた、この辺のもんちやうやる。何してんねん。どっから入った。

佐伯 あの、あつちの。

菊江 勝手口からか。泥棒か。(と、恐ろしい形相で佐伯に近づく)

佐伯 あの、あ、これ、傘。

菊江 見たらわかるがな。

佐伯 傘、修理しました。

菊江 え。

佐伯 これ、壊れてます。そやから。

菊江 傘ナオシか。

佐伯 あ、そうです、傘ナオシです。

菊江 傘ナオシも、この辺ももう大分見かけへんけども。

佐伯 いや、傘ナオシも儲かりませんから。普段は違う仕事してるんです。

月末やし、ちよつと、回って……て思うて。

菊江 おまえ、泥棒やろ。

佐伯 いや、違います。

菊枝 ええ度胸してるやんけ。どこの家や思うてんねん、ええ。(と、傘で佐伯を叩き始める)

佐伯 ちよつと。(思い切り殴られる) 痛つ、……痛いです。

菊江 ワナタベいうたら、ポリでも、ヤーコーでも、頭上がられへんで。おまえ、ただで済む思うてんのか、こら。(と、叩き続ける)

佐伯 ちよつと、ちよつとやめてください。私、七瀬さん呼びに来たんです。

菊江 え。(と、叩くのを止める)

佐伯 七瀬さん。おるでしよ。

菊江 七瀬様は、うちのお嬢さんやけど。

佐伯 やっぱり、いてるんや。どこに。(と、奥に入ろうとする)

菊江 (佐伯をつかんで) ちよつと。勝手に入んな。

佐伯 七瀬さん、出してください。(と、奥に入ろうとする)

菊江 やめ。あんた、七瀬様の何なんな。

佐伯 佐伯が来たて、言うてくれたら、わかりますわ。七瀬ー、七瀬ー。(と、弱弱しい声で叫ぶ)

菊江 やめてください。何時や思ってるんですか。七瀬様は、亡くなりまし
た。

佐伯 え。

菊江 今日が四十九日です。

佐伯 え、嘘やろ。ちよっと、おばちゃん、冗談きついわ。

菊江 誰がおばちゃんやねん。

佐伯 すんません。

菊江 こんな冗談、誰が言うんですか。

佐伯 ……それ、絶対嘘や。あ、追いつ返そう思ってる、そんなん。

菊江 ほんまです。

佐伯 それはないわ。中におるんやろ。(と、無理に入ろうとする)

菊江 もう、ちよつ、やめやつ。(と、思いつきり佐伯をつきとばす)

佐伯 (床に倒れて) 痛っ。(と、足をさすっている)

菊江 ……足。

佐伯 大丈夫です。…七瀬さん、会わせてください。お願いしますわ。

菊江 おらんもんは。会わされへんやろ。

佐伯 ほんまなんですか。

菊江 しつこいなあ。

佐伯 え、なんで、死んだんですか。元気やったやないですか。

菊江 事故です。

佐伯 え、何の。

菊江 自転車に乗ってはって。車とぶつかったんです。頭打って、そのまん
ま。意識、戻らんかったんです。

佐伯 そんな、急に。

菊江 そうです、急ですよ。突然ですわ。うちらも、びっくりしてるんです。

佐伯 はあ。

菊枝 しゃあないでしょう。もう戻ってきはれへんねんから。

佐伯 ……六月十四日に。

菊江 そうです。もう納骨も終わって。位牌も黒塗りのん、できましたわ。

佐伯 そんなん。

佐伯 落ち込み、座り込んでる。

菊江、奥に入り、佐伯にお茶を出す。急須を持っている。

菊江 ……すんませんけど。上に、寝たきりの病人おるんですわ。食事せな

あかんから。行きますけど。…あんだ、佐伯さん。

佐伯 はい。

菊江 まだいてはります。

佐伯 ……。

菊江 ……ちよつとここで、待つといってください。勝手にうろろせんとい
てくださいね。後で、お参りしたらええですわ。

菊江、急須を持って、部屋から出ていく。

佐伯、しばらく呆然としている。鞆から、紙を取り出して見ている。

慎治、勝手口のほうから部屋に入ってくる。傘を五本持っている。佐伯をじつ
と見る。

佐伯 ……あ、どうも。

慎治 (お辞儀をして、傘を置き、散らばっている傘をまとめ始める)

佐伯 ああ、片付けなね…。

佐伯、何もせずに見ている。

慎治、傘を整え終わる。

佐伯 あんだ、この人。

慎治 ……。

佐伯 私、佐伯、言います。…七瀬さんの知り合いです。

慎治 (頷く)

佐伯 七瀬さん…死んだて、ほんまですか。

慎治 (頷く) ……そうですか。…あ、これ。(と、さっき見ていた紙を、慎治に見
せる)

慎治 ……これ、家借りた、契約書です。

佐伯 ……。

慎治 本物ですよ、これ。

佐伯 (頷く)

慎治 二LDK、やっと見つけたのに。

佐伯 ……。

慎治 ……何であんだ。しゃべらへんの。
(頭を下げて、首を振る)

佐伯　しゃべられへんの。

慎治　（頷く）

佐伯　ああ、そうですか。すみません。

慎治　（頭を下げる）

佐伯　あの……七瀬さんとね。

慎治　（頷く）

佐伯　あの日、私、待ち合わせしてたんですよ。アベノのところで。

慎治　（頷く）

佐伯　それが……いつまで待っても、来えへん。あいつ、遅刻なんかせえへんし。遅いなあ思うて。……二時間、三時間して。電車の時間もとっくに過ぎて。……しまいには、歩道橋のどこまで行って、待ってたんですよ。来えへんくて、何でかな……。

慎治　……。

佐伯　ほんまに。おらんのかなあ。

慎治　立ち上がり、部屋から出ていく。

佐伯　あ、ちよつと。奥入ったら、おばはんには、怒られますよお。

佐伯　慎治が去った跡を見ている。

七織　風呂場のほうから部屋に入ってくる。髪が濡れていて、浴衣を着ている。

佐伯　部屋から降りて、七織に向かっっていく。

佐伯　七瀬。

七織　え。

佐伯　どこ行ってたんや。俺、ずっと待ってたんやで。

七織　誰ですか。（と、後ずさりする）

佐伯　俺、あはや。死んだで、信じてもうて。あはやわ。

七織　あんた、誰、何。

佐伯　（七織の腕をつかもうとする）七瀬。

七織　（逃げながら）何なん。

佐伯　（動こうとするが、足をかばってうずくまる）あ、痛つ。

七織　ケガしてんの。

佐伯　大丈夫や。さつき、あのおばはんには、やられてもうてな。

七織　え、菊江さんが、やったん。

佐伯　大丈夫、心配ないて。

七織　……。　（佐伯に近づく）

佐伯　（七織の腕をひっぱり抱きつく）

七織　ちよつと。（と、抵抗する）

佐伯　生きてるよな。おまえ、生きてるよな。（と、きつく抱きしめる）生きてるな、生きてるな。

七織　ちよつ、やめや。

佐伯、七織を抱きしめながら、泣いている。

佐伯　よかった。……ほんま、よかった。

七織　……。

佐伯　アベノでずっと待っててんで。俺は、おまえがいてなかったら、あかんねん。

七織　……。

佐伯　……。……ごめんな、ちよつとあわててもうて。（と、七織をゆっくり離す）そや、これ、見て。（と、紙を七織に見せる）

七織　契約書。

佐伯　ちゃんと借りたから。これで大丈夫や。

七織　広島。

佐伯　俺の実家から、電車で二十分ぐらいのところや。ええとこやで、緑もあるしな。市内に近いから、働くところもあるし。俺も、ちんどん屋やめて、ちゃんと仕事するわ。

七織　……。

佐伯　家のことも、ちゃんと言うた。

七織　何。

佐伯　養育費があるから、もめるやろけど。なんとかなるわ。

七織　……離婚すんの。

佐伯　もうちよつと待ってな。

七織　奥さんと、子供が、おるん。

佐伯　何、言うてんの。

七織　あんた。七瀬と、広島に、行くつもりやったん。奥さんと子供、置いて。

佐伯　……七瀬。

七織　アタシ七織です。七瀬の、双子の妹です。

七織

佐伯 双子。…え、妹。双子。

七織 はい。

佐伯 双子。

七織 そうや、言うてるでしょ。

佐伯 ああ。失礼しました。…あんたは七織さん。…ほんな七瀬は。

七織 死んだんやろ。

佐伯 え。

七織 アタシも、知りませんよ。

佐伯 知らんて、妹やろ。

七織 仕事場に、電話かかってきて。いきなり言われたんですよ。どうやって調べたんか知らんけど、不動産屋が、お姉さん死にました。そんなん、誰かて、びつくりするでしょう。

佐伯 いや、俺かて。いきなり、今、聞いて。ほんまなんかなあ思うてたら。

七織 そっくりなあんた、出てきたし。

七織 幽霊みたいに言わんといてや。

佐伯 何がなんか。…どういふことなんか。

七織 あんたは、七瀬と会ってたんでしょ。

佐伯 はい。

七織 ほんないいじゃないですか。アタシは十年も。高校んときからずっと、会ってないんですよ。

佐伯 はあ。

七織 そんなんで。実感わかへんでしょ。

佐伯 ……そうやわねえ。

間。

佐伯 ……すみません。

七織 え。

佐伯 間違えて、すみませんでした。

七織 ええけど。

佐伯 ……よう似てるから。

七織 似てない。

慎治 部屋に入ってくる。白いツボを持っている。

七織 何やってんの。

慎治 (ツボを佐伯の前に置く)

佐伯 何ですか。

慎治 ……。

七織 家用の骨。

佐伯 え。

七織 うちは、墓に入れるんと、家の中に置いとくと、二つに分けるんです。

佐伯 え、これ。

七織 七瀬のん。

慎治 (頷く)

佐伯 ……。

七織 菊江さんにゆうた。

慎治 (首を横に振る)

佐伯、ツボに手を添えて、じっとしている。フタに手をかけるが開けない。

七織 この家のなあ、女の骨は全部、二階にあるんです。こんな、ちいちゃいツボに入って。ずらーっと、棚に並んでんねん。…めっちゃ気持ち悪いやろ。

七織、慎治を思いきり叩く。奥から、ビール缶を三本持ってくる。

七織 どうぞ。(と、ビール缶を差し出す)

佐伯 ……。

七織 (慎治の前にビール缶を置き、ビールを飲む)……あんたも飲みや。

慎治 (首を振る)

七織 飲めるやろ。中学から飲んでたやん。

慎治 ……。

七織 あ、文化祭のとき、酔っ払って川飛び込んだやろ。ほんま、昔っから、あはやったなあ。

慎治 (ビールを一口飲む)

七織、たまにビールに口をつける。

慎治、飲まずに座っている。

佐伯、じつとしたまま動かない。

七織 あれ……三年のときやった。席、隣だったとき、アタシの筆箱盗ったやろ。知ってんねんで。

慎治 (頷く)

七織 上履きも隠したやろ。

慎治 (首を振る)

七織 嘘つくな。

佐伯 ……三人は、幼馴染なんですか。

七織 そうや、同い年。そのナガ小で一緒やってん、なあ。

慎治 (頷く)

七織 高校は、この子だけ、離れてんけど。

慎治 (頷く)

七織 もう、うつとしい、しゃべりいや。会話でけへんやん、

佐伯 え、しゃべれるんですか。しゃべられへんのと。

七織 この子、めっちゃしゃべりや。サルのジンチやもん。キーキーうるさい。

佐伯 ああ、ジンチさん。

慎治 (頷く)

佐伯 何で、しゃべらへんの。

七織 説明しいや。(と、慎治を叩く)

佐伯 あの。別にそんな。何でかなあと思うただけやから。

七織 祭りや。

佐伯 ああ、お祭り。あの、道しるべ立ってましたわ。

七織 そんなあった。

佐伯 川の、細い橋、渡ったとこに。「はっさく祭り、こちら」て、あれですよね。

七織 そうや。

佐伯 はっさくて。え、みかんとか、あれですか。

七織 違う。八月の、朔日で、はっさくや。

佐伯 朔日て。

七織 一日。

佐伯 へえ、勉強になりました。あ、ほんで、祭りやから、ジンチさん、しゃべれへんのですか。ジンチさんだけ。

七織 知らんがな。

佐伯 ほな、女は何かあるんですか。

七織 それ。(と、傘を指差す)

佐伯 え、傘。

七織 傘、磨くねん。

佐伯 ああ。何で磨くんですか。

七織 知らんゆうてるやん。

七緒、ビールを飲み干し、新しいビール缶を奥から持ってくる。

七織 ちんどん屋って、何すんの。

佐伯 え。

七織 さつき言うたやん。

佐伯 ああ。

七織 歌、うたうん。太鼓とか叩いて。

佐伯 ああ……そう、太鼓、笛とか。アコーディオンとか。そんなに合わせ

て、歌うとうて歩くんです。芸できるヤツは、道の途中でやったりね。

七織 大道芸みたいなん。

佐伯 そうです、そうです。商店街とか、あ、お祭りとかもね。そうゆうん

に呼ばれて。景気づけに、ちんどん、ピーひやら、やるんです。

七織 何か、昔、この辺でもおつたな。

慎治 (頷く)

佐伯 そうですかあ。もう減ってきてねえ。ちんどんやらんでも、娯楽はい

ろいろあるから。

七織 事務所とかあんの。

佐伯 そういうところから依頼はきます。俺は、めんどくさいから、個人でやっ

てますけど。

七織 儲かんの。

佐伯 全然儲かりません。

七織 あかんやん。

佐伯 そやから、広島行ったら、ちゃんと仕事するつもりやったんですけど。

七織 広島行かんでも、仕事はできるやん。

佐伯 ああ。

七織 奥さん、子供もおつたのになあ。

佐伯 ……。

七織 ……あの子は、ほんま、くそまじめで。アタシと正反対でなあ。高校で

も、男とつき合ったことないんちゃう。なあ。

慎治 ……。

七織 若いとき遊んでない子が、大人なってハマったら、こわいっちゃうパターン、そのまんまや。あほやわ。

佐伯 あほやないですよ。

七織 あほやなかつたら、奥さんおる人に、手出さんやる。アタシかて、素人はよう騙さんわ。心苦しうて。

佐伯 ……俺が悪いんです。

七織 不倫に、どっちが悪い悪ないて、あるん。七瀬もあんたも同罪やろ。

佐伯 ……はい。

七織 しつかりしいや。ぴーひやらゆうてる年ちやうやろ。

間。

七織 七瀬と。何で、出会い系とか。

佐伯 いや、七瀬が。あ、すんません。

七織 ええよ。

佐伯 七瀬とは二年前に会って。アベノの安定所の近くの神社で、ちんどんやってたんです。あいつは、神社のお茶コーナーで、ボランティアやってて。

七織 ボランティアアねえ。

佐伯 お疲れさまあて、いっつもお茶入れてくれました。

七織 愛想はよかったもんな、あの子。

佐伯 みんなにしてたんです。誰に対してもおんなじ。日雇いとか、ホームレスも。そんなんにも、お茶、配ってました。

七織 天使みたいな子やったんやなあ。

佐伯 人間です。人間やから、つらいときもあります。

七織 よう知ってるやん。

佐伯 酔っ払いに襲われそうだったり。俺、二、三回助けたんやけど。何べん言うても、人見て判断でけへんし。

七織 ふーん。

佐伯 金くれ言われて、後つけられて。警察に言うたんですけど、全然相手してくれへんし。

七織 警察がアタシら、チヌのもんを、相手するわけないわ。

佐伯 そんなで七瀬はずっと来てて。俺もよう話すようになつて。

七織 何か昼メロみたいやな。

佐伯 俺みたいな、しょうもないもんの話でも、よう聞いてくれました。

七織 やっぱり昼メロや。

佐伯 ちんどん屋で、金もない、足も悪いし。ええとこないんやけど。

七織 最悪や。

佐伯 まあ、そうなんやけど。七瀬は、普通に声かけてくれただけやと思いません。俺が悪いんです。

七織 だから、もうええ言うてるやろ。ほんまに悪い思うてんのか。あんたみたいな、ゆるいこと言うヤツが、一番タチ悪いねん。あんた、結局、七瀬より自分がかわいいんやろ。そやから、二年もほっといたんやろ。

佐伯 そりや、俺かて。

七織 あんた、ほんまにそう思うんやったら、とつくに話つけて、広島でもどこでも行ってるんちゃうの。

佐伯 そう。

七織 何がちんどん屋や。最低や。女養う、女困う金もないくせに。手、出すなや。

佐伯 ……すいません。

七織 今さら、謝ってもうても。七瀬は何も言われへんねん。

佐伯 もっと早う、何とかしとつたらよかつたけど。

「ごめんください」と、奥から、明るい奇妙な、女性の声が聞こえる。

七織 早うしたら、あのが子早う死んだだけやろうが。あほか。あほすぎるつ。

七織 部屋から出ていく。

佐伯 ……わかってますねん。俺はあいつとつり合うてないて。

慎治 ……。

佐伯 ジンチさん。あいつが待ってたんは、あんたですかね。

慎治 (首を振る)

佐伯 そうですか。

佐伯 ツボに触り、祈る。

慎治、佐伯を見て、一緒に祈る。

七織、傘を7本持って、部屋に入ってくる。傘の束を床に置く。一本の傘を持ち、慎治を指す。

七織 七瀬は、磨いてたん。

慎治 (頷く)

七織 意味ないこと、何で続けるんかなあ。

七織、傘で、慎治の胸を突く。

慎治、傘の先を受け止める。

奥から声が聞こえてくる。声が小さく、ことばが聞き取れない。徐々に声が大きくなり、菊江であることがわかる。

菊江 ……世界の果てまで地の果てまでも……栗色にでも黒髪にでも……盗みもするわあの月さえも……あなたが言うなら……国も捨てるわ友もいらぬ……私はかまわぬあなたと行くから。

「愛の賛歌」であることがわかる。

菊江、部屋に入ってくる。お膳を持っている。

七織 また歌謡ショー、始まった。

菊江 何してはるんですか。

七織 (慎治の胸から傘を抜く) チドリ屋来たで。

菊江 あ、チドリ屋さん、はいはい。あ、七織様、この人、佐伯さんゆうて。

七織 ちんどん屋やる。

菊江 ちんどん屋。傘ナオシ違うの。

佐伯 あ、ちんどん屋であり、傘ナオシでもあります。

七織 何、傘ナオシって。

菊江 傘修理ですわ。七織様、見たことないですか。昔は、この辺に、傘と

か靴とか、修理がよう来てたんです。

七織 あんた、直せんの。

佐伯 直せませす。

七織 直してみ。(と、傘を差し出す)

佐伯 ……

菊江 七瀬様の知り合いみたいですけどねえ。(と、奥に入る)

七織 これから、どうすんの。(と、傘を床に置く)

佐伯 え。

七織 あんたや。広島に行くんやろ。

佐伯 ああ。

七織 ああて。ほんま、しつかりしいや。

佐伯 (笑っている)

七織 何や。

佐伯 七瀬にも、よう言われましたわ。

七織 あたりまえや。

佐伯 もっと、優しい言い方やったけどね。

菊江、こうごり、きゅうりもみ、小皿、箸を持ってくる。

菊江 これでも、ちよつとつまんでください。(ツボに気づき、七織の顔を

見る)

七織 この子や。

慎治 (首を傾げる)

菊江 何、こんなとこに持ってきて。(と、取り上げる)ちゃんと上に。(と、

部屋から出て行くとする)

七織 まだええやん。

菊江 え。

七織 今日ぐらい、下に置いといてええんちゃうの。

菊江 まだ、ええですけど。

七織 上、行ったら、ただの骨になってまう。

菊江 ただの骨やないですよ。

七織 じゃ、何なん。

菊江 尊い、七瀬様です。

七織 尊ないがな。アタシの妹や。

佐伯 ビール、持ってきましたよか。

七織 あ、いや。結構です。俺、飲まれへんから。

佐伯 アタシお茶。飲まれへんの。

菊江 一口飲んだから、すぐ赤くなるんですわ。

慎治 慎治さんは

慎治 (首を振る)

菊江 昔の男は、どんだけ飲んでも、仕事はちゃんとやってきましたで。あんたもそれぐらい、なつてもらわんとな。

佐伯 これが、煮こりですか。(と、こごりを指す) 魚ですよね。

七織 牛肉や。

佐伯 肉ですか、珍しい。

菊江 このチヌでは、それ、こごりゆうんです。食べてみてください。

佐伯 いただきます。(と、こごりを一口食べる) …ん、おいしいわ。

七織 無理せんでええて。

佐伯 いや、食べやすい。色は濃いけど、あっさりしてるんですね。

菊江 それ、牛の一番おいしいところなんよ。

佐伯 え、どこですか。

菊江 牛は、足首の裏が一番おいしいんや。アキレスのどこ。

佐伯 へえ。いや、おいしいですわ。

菊江 菊江さん、飲めへんの。

七織 もう片付いてるやん。

菊江 まだ、これ。(と、傘を指す)

七織 あと、モリヤシキさん、アンシン屋さんは来るんちやいますか。

佐伯 ……。

菊江 チヌで、何か変わった名前ですわ。

菊江 ここはねえ、神武天皇の、お兄さんの、五瀬命(いつせのみこと)ゆうんが、戦いのときに、この土地で、手の傷を洗ったゆう、尊いとこなんすわ。

佐伯 へえー、すごい。歴史があるとこなんや。

菊江 まあ伝説やけどねえ。

七織 血の沼や。もともとは。

佐伯 え。…ああ、漢字、今は違うやないですか。

七織 そのまんまやと、縁起悪いからやろ。

佐伯 なるほど。

菊江 (こごりを食べて) ん、おいしいわ。…はい、慎治さんも、食べて。

薄かったら、醤油かけて。(と、醤油を奥から取ってくる)

慎治 (頷き、こごりを食べる)

七織 おいしいか。

慎治 (頷く)

七織 まあ、まずいいわれへんわな。

菊江 七織様。全然、食べてない。

七織 嫌いやから。

菊江 昔つから食べはりませんねえ七瀬様は、大人なってからは、食べてはりましたよ。

七織 ……。

菊江 ほんまは、七瀬様と七織様に、こごりの作り方、教えたかったんですけどねえ。

七織 アタシ、料理せえへんし。

佐伯 あいつ、やってみましたよ。

菊江 あいつて。

佐伯 あ、すんません。七瀬さんは、料理やってみました。

七織 何、作った。

佐伯 カレーとか、ハンバーグとか。

七織 レトルトちやうの。騙されたな。

佐伯 いや違います。和風ハンバーグいうんですか。大根おろしかけて。

七織 大根は、そのまんまやと思うけど。

佐伯 あ、食パン、入っていました。

菊枝 食パンは、うちの作り方やわ。

佐伯 そうですか。たまに、パンが、えらい大きくなって。なんか、ハンバー

グいうより、食パンの塊、食べてるみたいなときはありました。

七織 普段やってなかった証拠や。

佐伯 いや、おもしろかったんですけど。ちよつと大きすぎるかな思うて。

七織 本人に言うた。

佐伯 言えませんよ。俺のために作ってもうたのに。

七織 七瀬、今頃、聞いてるでえ。

菊枝 (涙ぐんでいる)

七織 何や、また。

菊江 あ、すんません。思い出してもうて。七瀬様、がんばってはりました

七織 へタなんは、認めてんねんな、みんな。

菊江 うちの教え方が、足らんかったんです。たぶん。

七織 (きゆうりもみを食べながら) これ甘いんちやうん。

菊江 そうですか。昔と、分量変わってませんけど。

七織 砂糖、入れすぎちやう。

佐伯 (七織の手に注目している)

七織 ……何。

佐伯 え、あ、すんません。箸の持ち方。

七織 ああ、おかしいねん。癖や。

菊江 昔から、直してくださいゆうてんのに。

七織 この年なつたら、もう直れへん。

菊江 努力が足らんです。

七織 こんなんで努力したないわ。

佐伯 あいつも、おんなじ持ち方してました。

七織 あ、そう。

菊江 あんた、七瀬様と。えらい親しかったみたいやねえ。

佐伯 ……。

菊江 まあ、よう来てくれはりましたわ。(涙ぐんでいる)

間。

佐伯 明日、お祭りなんでしょ。

菊江 ……ああ、はいはい。そうですよ。百年に一回の大祭でねえ、すごい

ですよ。

佐伯 そうなんですかあ。あの、何で、ジンチさん、しゃべらんですか。

菊江 ああ。まあ、そういう。やり方です。

佐伯 この人だけ、ですか。

菊江 まあ、そうやね。

佐伯 へえ。傘は、何で磨くんですか。

菊江 ……七織様。

七織 別にかまへんやろ。

佐伯 あ、何か。

菊江 傘はね、磨くんです。

佐伯 はあ。…まあ、いろんな風習が、やり方ありますねえ。

菊江 そうです。ここはこのやり方があるんです。

七織 もうほとんどないけどな。

菊江 あります。

七織 誰も、祭りなんか、盛り上がってないやん。

菊江 ちゃんと心ん中では思ってるんです。

七織 心で、何思ってるか、どうやってわかんのか。

菊江 わかりますがな。おんなじ村のものやのに。

七織 アタシは菊江さんのこと、わからんよ。

菊江 うち七織様のこと、わかってるつもりです。

七織 何をわかってんの。

佐伯 親子喧嘩みたいや。

菊江 どんでもありません、恐れ多いですわ。

佐伯 あ、様で、ゆうてはるんは。

菊江 このワタナベの家のお嬢様は、みんなヒメ様なんです。

佐伯 へえ。…ほな、七瀬も。

菊江 そうです。

佐伯 ヒメ様も、祭りに関係あるんですか。

菊江 ……。

間。

佐伯 (姿勢を正して) あ、ほな……そろそろ失礼しますわ。

菊江 そうですか。

佐伯 遅うにすんませんでした。ごちそうさまでした。こうごり、おいしかった

たです。

菊江 何もお構いもせん。あ、足、すんませんな、さつき。大丈夫ですか。

佐伯 ああ、これは生まれつきやから。

菊江 あ、そうですか。お大事に。

佐伯 はい。…俺、広島に行きますわ。

七織 わかつてるがな。

佐伯 これ…。(と、鞆から、小さな竹の筒を、テーブルの上に出す)

七織 何これ。

佐伯 小学校とき、俺が初めて作った笛です。

七織 笛なん。へえ。(と、笛に手を伸ばす)

佐伯 ああ、どうぞ。吹いてみてください。

七織 (何度か吹いてみる) 鳴らんやん。

佐伯 そう、失敗作ですわ。俺の、最初で最後の竹の笛ですわ。才能なかつ

たんやな。(笛をテーブルに置いて) 才能で。

佐伯 俺の親父、竹細工の職人やったんですよ。

菊江 広島のはんはねえ、職人多いみたいやねえ。

佐伯 はい。俺がゆうんも何やけど、ええ職人で、全国から竹細工の注文来てましたわ。

菊江 継ぎはらへんかったんですか。

佐伯 俺は不器用で。やろう思ったけど、この調子で、才能ありませんでしたわ。

七織 それで、ちんどん屋。

佐伯 笛でちんどんですわ。これ、あいつに見せたとき、きれいなあて、言うてくれました。全然鳴らへんけど。きれいなあて、言うてくれたんです。

七織 また昼メロか。

菊江 何ですか、昼メロ。

佐伯 これ。(と、ツボの横に添える) 骨と一緒に置いといてください。

菊江 え。

佐伯 この骨、家に置いとくんでしょ。上の棚に。

菊江 そうやけど。

佐伯 笛、一緒に置いといてください。お願いします。

菊江 急に言われても。

七織 ええやん。置いとけば、誰に許可要んの。

菊江 そやかて。あそこは、神聖な。

七織 アタシがええゆうたら、ええんちゃうの。

菊江 ……別にええですけど。置いとくだけやったら。

佐伯 すんません。お願いします。(鞆を持って) ありがとうございました。

ほんなこれで、失礼します。

七織 ちよう待って。

七織、白いツボを持って、奥に入る。

七織 入れもん、ない。何か、小さいの。

菊江 え、どんな。

七織 小さい、密封できるヤツ。ちっさいのでええねん。(と、容器をいろいろ出してみる)

菊江 これは。(と、容器を出してみる)

七織 透明やなくて。

菊江 ……小さいのん。(と、小さな青い容器を出す)

七織 あ、それでええわ。(と、白いツボから、小さな青い容器に、骨を入れる)

菊江 ちよつと、あー。

七織 黙つとつたらわからへん。

菊江 七瀬様の骨。

七織 (手際よく骨を数個入れて、容器を閉じる)

七織 あんたも黙っててや。

慎治 (頷く)

七織 (佐伯に、容器を差し出して) はい。

佐伯 ……。

「ごめんください」と、奥から、明るい奇妙な、女性の声が聞こえる。

菊江 あれ、モリヤシキさんかな。ちよつと出てきますわ。

菊江、部屋から出ていく。

七織 持つて行きや。

佐伯 あほな、あわれな、おっさんに、すんませんな。ありがとう。

七織 何で七瀬があんたを好きになったんか、わからんわ。

佐伯 さいなら。

佐伯、勝手口のほうに部屋から出ていく。

七織、佐伯が去った跡を、見ている。

慎治、七織を見ている。

ときどき、玄関のほうから、女の笑い声が聞こえる。

七織、テーブルに戻り、きゆうりもみを食べる。

慎治、こうごりを食べる。

七織 おいしい。

慎治 (頷く)

七織 ほんま。

慎治 (頷く)

七織 (慎治の頬をつねる) 嘘ついたらあかんで。

慎治 (頷く)

七織 七瀬のこと、好きやってんやろ。何で、言わへんかったん。

慎治 ……。

七織 あんたが言うてたら、あの子。不倫なんかせんと。死なんで済んだかもしれん。(手を離す)もう遅いけど。

慎治 (七織を見つめる)

七織 何。

慎治 ……。

七織 あんたは、何でここにおるん。はよ帰ったらええやろ。

菊江、傘を9本持って、部屋に入ってくる。白い布の束も持っている。白い布と傘の束を床に置く。

菊江 アンシン屋の奥さんでしたわ。あの人、もう行ったんですか。

七織 ああ。

菊江 そうですか。今日は、何か、人の出入りありますねえ。神さんがイタズラしてはるんか。

菊江、床に座って、白い布で傘を磨き始める。

七織、慎治、菊江の作業を見ている。

菊江 七織様、もうこれ、ええですか。

七織 ええよ、食べへん。

菊江 慎治さん、ここ、片付けて。残りは、ラップして、冷蔵庫入れたらええから。

慎治 (顔を、こうごり、きゅうりもみ、小皿、箸、ビール缶などを片付け始める)

七織 何してんの。

菊江 よその人、おったらできませんやろ。七織様もやりますか。

七織 何でアタシが。

菊江 七瀬様は手伝ってくれはりましたでえ。大事な八朔の日やから。

七織 何で、傘磨かなあかんの。

菊江 忘れたんですか。小さい頃に、説明しましたやろ。傘は、神さんのヨリシロです。傘をようさん立ててる家に、神さんがやって来るんです。

七織 神さん、おるんやったら出してみや。

菊江 昔から、七織様と七瀬様を子守りしながら、傘磨いてたんです。今年も、神さん来てくれますようにて。

七織 何で、アタシとこなん。

菊江 ワタナベは、代々、神様と通じるヒメ様がおりますから。七織様かて。

七織 様は、もうやめや。

菊江 ヒメ様はヒメ様ですから。

七織 アタシは人間。七瀬も人間。上におる、お母ちゃんも、おばあちゃんも、人間やろ。

菊江 何回も言わせんといってください。ヒメ様はヒメ様です。

七織 今どき、祭りなんか、まともにやってないやん。やめたらええんちゃうの。

菊江 ご先祖様に、申し訳ない。

七織 骨に。申し訳ないの。

菊江 ワタナベのご先祖はみんな、ヒメ巫女やったんです。自分のことより、村のことを考えてはったんです。

七織 そんな人間、おるわけないやろ。

菊江 そやから、ヒメ巫女様やないですか。

七織 あんたらが、そうさせてんやろ。お母ちゃんも、おばあちゃんも。スマコさん、ハマコさん、チカエさん、ナミコさんもなあ。

菊江 ナガコ様と、コミエ様を忘れてます。

七織 どうでもええがな。

菊江 うちがやらな、誰がやるんですか。これは命です。

七織 メイ。

菊江 自分らの家より、ワタナベのこと考えてたんが、うちの先祖です。ワタナベをずっと守りたい。それがうちの命です。

七織 菊江さんが、何でそこまで、こだわるんか、わからんわ。

菊江 七織様、今日、何で戻りはったんですか。

七織 七瀬が死んだからやろが。

菊江 戻らんでも済んだはずです。戻ったんは、ここが大事やとわかってるから。自分しかおらんとわかってるからでしょう。

七織 ……アタシはわかってる。

菊江 ねえ、そうですよ。七織様しか、もうおらんのやから。もともと、七織様が上やから、ねえ。露払いは古い習慣やわ。

七織 七瀬は自殺や。あんたもそう思うてるやろ。

菊江 何言うんですか。

七織 アタシ、わかったもん。仕事してたとき、七瀬が死んだて、はっきりわかった。

菊江 虫の知らせですね。さすが姉妹やわ。

七織 「お姉ちゃん、ごめん」て、聞こえた。…何で謝んの。先に死ぬから。自分で死ぬから謝ったんや。

菊江 空耳です。

七織 アタシらに、村のクズども、押し付けて。都合悪いこと、なかったことにして。この家守っていく。それが、あなたのメイなん。

七織、部屋から出ていく。

慎治、七織の去った跡を見て、追いかけてしようとする。

菊江 そつとしときな。…片付いたか。あんたも、一日よう我慢したな。ご苦労さん。

慎治 (頭を下げる)

菊江 大祭やからなあ、形だけでも、復活させたかったんや。悪かったなあ。

慎治 (首を横に振る)

菊江 ほんまは、あんたにやらすんも、あかん思うたけど。他に、適当な男もおらんくなつたし。木村慎治としてなら、許されるやろ。

慎治 ……。

菊江 もう今年で最後やわ。……：ほんまの八朔は。前の日に、何十もの傘を磨いて。こんなんちやう、もつともつと。この天井に敷きつめて、外の壁に立てかけて。のし瓦にも何十も載せてな。そうやって神さん降りてくんのを待つねん。…：ヒメ巫女様は、自分が選んだ男から、一晩中、力をもろうて。そんなかわり、八朔の日は、ヒメ巫女様が、村の男に力を与える。外の女に相手にされん、クズ男の、唯一の慰めや。…：外では、牛の肉焼いて、歌って踊って。肉を焼いた匂い、火と酒と交じり合おうて。…：汚いけど神聖で、何もかんも忘れる日や。…：そんなすばらしいときが、あつたんやろなあ。うちも、見てみたいわ…：。こんなところに、神さん来るわけないもんな。

慎治 ……。

菊江 あなたの国でも、そんな祭りある。

慎治 ……。

菊江 知らんわな。どうでもええか。

慎治 ……。

菊江 七織様、ここで寝るから。…：あんたも、風呂入って、体きれいにして。

慎治、菊江が磨いた傘を奥に置いて、風呂場のほうに出ていく。

4

菊江、傘を磨いている。そのうち、子守唄を歌い出す。小さな声で、少しずつ、聞こえてくる。

菊江 ……ねんねんころりよ おころりよ 坊やが良い子だ ねんねしな
ぼうやのお守は どこへいた あの山越えて 里へいた 里のみやげにな
にもろた でんでんたいこに 笙の笛。

菊江、傘を磨き終わり、奥に傘を持っていく。座布団とテーブルを隅に寄せる。テーブルの上にある、白いツボを見る。白い布を持って、部屋から出ていく。

間。

七織、タオルケットを持って、部屋に入ってくる。タオルケットを置き、テーブルの上にある、白いツボと笛を見る。ツボを開けて、中を見ている。

しばらくして、慎治、風呂場のほうから部屋に入ってくる。寝巻きを着ている。七織を見る。

七織、ツボを閉じて、奥からコップの水を持ってきて、慎治に渡す。

慎治 (頭を下げる)

七織 まだ、しゃべれへんの。根性入ってんなあ。

慎治 (水を飲む)

七織 あんた、離れで寝るんやろ。ここにおるんは、七瀬のはずやったのになあ。残念でした。

慎治 ……。

七織 戻ったら。ヒメが行くまで、大人しく、男は待つんやろ。

慎治、コップをテーブルの上に置き、部屋から出ていこうとする。

七織、慎治を止めて、頬をつねる。

七織 痛い。

慎治 ……

七織 ヒメ様は、何考えてたんやろ、知ってる。…考えたら生きてられへんから、狂ったのかなあ。教えて、七瀬が、あんたを選んだん。

慎治 ……

七織 七瀬やったら、祭りは復活したんやるか。

慎治 (七織の手を離して、部屋から出ていこうとする)

七織 アタシやったらあかんの。穢れてるから。

慎治、七織を見つめる。離れのほうに出ていく。

七織、慎治の残した水を飲み干す。慎治の後を追うように、離れのほうに出ていく。

間。

未明になる。

菊江、部屋に入ってくる。目の周りに、泥のような、赤黒い色を塗り、ネグリジェを着ている。ぶつぶつと何かつぶやいている(*)。まるで、能の摺り足のように歩く。部屋を中心にゆっくり進み、東西南北の四方を順に、ゆっくり進む。

* つぶやくことば

どうどうたらり たらたらり あらたらたらり たらたらり

手をすすぎ この地に落ちぬ 紅い花

よるこびは 苦悩の蓮華 夜の月 涙を浮かべて 跪く

かなしみは 川から海へ 陽の光 あしたを笑い 流される

漕ぎ出すこい路 ゆれながら くりかえす波 つかのまの
時を忘れて 言問わん 道の途中で 果つるとも

朔日に 水は流れて 紅く咲く

どうどうたらり たらたらり あらたらたらり たらたらり

七織、離れのほうから部屋に入ってくる。浴衣の着付けが乱れている。菊江の様子を見ている。

菊江、中央で止まる。七織に向き直り、正座する。

菊江 (深くお辞儀する)

七織 喉渴いた。

菊江 (立ち上がって、テーブルの上のコップを使い、奥から水を入れてくる) どうぞ。

七織 (コップを受け取り、水を飲む) 何してんの。

菊江 練習です。

七織 何時やと思うてんの。

菊江 二時ぐらいですか。

七織 明日、あ、今日か。何時からやんの。

菊江 傘は六時ぐらいに、出しますけど。

七織 あ、そう。

菊江 朝、何食べはりますか。ご飯は食べへんでしよう。七織様は、いつもパンやったから。

七織 ……ホットケーキ。

菊江 え。

七織 あかんの。

菊江 ホットケーキの素、ありませんがな。(と、奥に入り、調べる)

七織 コンビニは。

菊江 駅まで行かなありませんがな。

七織 不便やな。

菊江 あ、モリヤシキさんやったら、早う開いてますわ。朝、買うてきます

わ。 どうも。

菊江 ホットケーキ、そんな好きでしたっけ。

七織 七瀬が好きやったら。

菊江 ……あ。

七織 照江さん、病院入ってんの。

菊江 何で知ってはるんですか。

七織 ジンチに聞いた。

菊江 あの手が。もうしゃべったんか。

七織 あいつ、しゃべりのサルやもん。

菊江 大したことないですわ。胃腸が悪い言うてるだけやし。いつでも退院してええんですけど。まあ、病院におつてくれたほうが、うちは楽やし。

七織 見舞いに行つてんの。

菊江 そんな、行かんでも。

七織 ふーん。上の二人は、入れへんくせに。

菊江 七織様は心配せんといってください。ナミ様とアキツ様のことは、ちゃんとやりますから。：起こして、すんませんな。うちも、そろそろ寝ますわ。

七織 誰も教えてくれんかったけど。照江さんが、ほんまはアタシが姉やて教えてくれた。ほんまは、七瀬じゃなくて……アタシ。

菊江 露払いなんか、昔はどこでもありましたがな。お母ちゃんも、七織様と七瀬様のことねえ。字、教えてくれたんが一番嬉しいて。今でも言うてますわ。

七織 書けるようになった。

菊江 名前ぐらいは、書いてます。役所でも困らんようになりました。

七織 あ、そう。

菊江 役所で、「わたしは字が書けません。わたしはあほです」て。背中に紙貼られた頃から思えば、幸せですわ。

七織 あほ言うヤツのほうが、あほやねん。

菊江 そうやねえ。字書けんより、気づかんと貼られたまんまで笑われたんが、恥ずかしいわ。

七織 あほなんは、そこにおつたヤツら、全員や。役所のヤツも。

菊江 まあ、そうです。あ、慎治さんにも、水、持っていってあげはったら。暑いからねえ。

七織 ……ん。

菊江 もう上に上げさせてもらいますわ。(と、白いツボを持つ)

七織 笛も。持つて行ってあげたら。

菊江 はい。おやすみなさい。

七織 (菊江の顔の泥をぬぐう) おやすみ。

菊江、白いツボと笛を持って、部屋から出ていく。

七織、泥で汚れた手を見ている。手を顔につける。離れのほうに向かって座り、ぼーっとする。

慎治、離れのほうから部屋に入ってくる。

慎治 何してんの。

七織 水、飲む。

慎治 うん。(と、七織の顔に触れる) 何これ。(と、泥が手につく)

七織 血や。

慎治 え。

七織 菊江さんの、踊りのときに顔につける、血や。ほんまもんちゃう、泥やけど。(と、コップを持って、奥に入る) 菊江さんが、踊りの練習しててん。

慎治 ああ。そうか。(手を寝巻きにこすりつける)

七織 何であんな熱心なんか、わからんわ。(と、コップを慎治に手渡す)

慎治 (コップを受け取り) ありがとう。(水を飲む) おいしい。

七織 水、持つていく。

慎治 ああ、そうやな。

七織 (ピッチャーに水を入れながら) アタシ、ここで寝るから。

慎治 え。

七織 ここのほうが涼しい。

慎治 あ、風、入ってくるからなあ。

七織 ……誤解せんといてな。

慎治 え。

七織 別に、どうつてことないから。あんたもやる。

慎治 ……。

七織 アタシも気にせえへんし。

慎治 そう。

七織 (ピッチャーを手渡す) おやすみ。

慎治 (ピッチャーを受け取り) おやすみ。

慎治、コップを置いて、部屋から出ていこうとするがやめる。ピッチャーをテーブルに置く。

慎治 明日、すぐ帰んの。

七織 そうや、もう今日やで。

慎治 そうか、今日。…祭りやけど。

七織 関係ないやん。

慎治 関係ないけど。もうちょっと、ゆっくりしたら。明後日やったら、俺

も休んで。

七織 仕事あるから。

慎治 ああ、そうか。

七織 アタシ、キャバ嬢やってんねん。

慎治 へえ。

七織 あんた、行ったことあんの。ハナゾノのとことか。

慎治 あそこはない。ナンバとかはある。

七織 行くんや。

慎治 俺かって、それぐらい。

七織 ピンサロは。行ったことある。

慎治 ない。

七織 ソープは。

慎治 …二回ぐらい。

七織 デリヘルは。

慎治 何で、いちいち言わなあかんの。

七織 いや、どれぐらいやってんのかなあ思うて。意外と少ないな。あ、D

VDとかでやってんの。

慎治 どうでもええやんけ。

七織 DVDは、どんなんが好き。

慎治 普通のや。

七織 普通で、どんなん。

慎治 ……。

七織 つき合ってる人、おるん。

慎治 おらんよ。

七織 ……アタシ、不倫してんねん。…七瀬みたいに昼メロちやうで。現実

的に、

慎治 お金のため。トウキョウ、家賃高いし。

七織 ……。

慎治 おやすみ。

七織 別にええけど。

慎治 何がええの。

七織 おまえが何しても、ええよ。

慎治 また昼メロか。

七織 そりやお互い、大人やねんから。いろいろあるんが普通やろ。

七織 大人な発言。

七織 ブタの、ドラエモンみたいなヤツやろ。

慎治 そうそう。あいつの親父がやってるとこ。

七織 儲かってんの。

慎治 儲かるわけないやろ。一人で食うていくんで精一杯や。いつつぶれる

かわからん。

七織 商店街も、全滅しそやもんな。

慎治 ジジババの店ばかりや。

七織 あんたどこ。お母さんだけやったつけ。元気なん。

慎治 もう死んだ。

七織 そう。…おじいちゃんとか、おらんかった。

慎治 じいちゃんは、国に帰った。

七織 そうなんや。

慎治 向こうの親戚が、俺とこに連宅してきて。帰りたいゆうから、じいちゃ

んだけ。

七織 そうやったん。あんたは。あんた、小四のときやったつけ。発表で、

国に帰りたいって、ゆうてへんかった。

慎治 お前、何でもよう覚えてんな。

七織 別に。

慎治 ここが俺の国やから。

七織 昼メロより、ちよつとかつこええ発言やな。

慎治 おまえが、昼メロ好きなんやろ。ヨン様とかなんとか、おっかけて

んのちやうんか。

七織 するか、あんなん。

慎治 そんならよかった。

七織 ジンチ。

慎治 何。

七織 呼んだだけ。

慎治 何やねん。

七織 ここにおるん。

慎治 ……。

七織 ……わからん。

慎治 問題意識ないな。ないから、その年まで、おったんやろけど。

七織 トウキョウ住んでるからゆうて、偉そうに言うな。

七織 もう十年ですから、プロです。

七織 俺も、トウキョウでも行くかなあ。

ウ湾に浮いてるか。どっちかやで。

慎治 きつついなあ。優しさとか、気遣いゆうもんは、おまえの辞書にないんか。

七織 ありません。

慎治 まあ、行ったら行ったで、何とかなるやろけど。

七織 …七瀬はどうなん。

慎治 どうって。

七織 今日、ここにおるんが、七瀬やつても、おんなじことしたんやろ。

慎治 それは違う。

七織 違わへんくせに。

慎治 ……七瀬はええ子やったけど。おまえは、憎たらしいわ。

七織 そやから、いじめたん。

慎治 靴、隠したんは、俺ちゃう。マツカワやで。

七織 マツカワ、えー。

慎治 何や。

七織 あの子、アタシにラブレターくれたのに。

慎治 嘘、ほんま。

七織 ほんま。そやのに、何で上履き隠すん。

慎治 好きやからや。

七織 あんとき、先生にめっちゃ怒られて。アタシが忘れたんちゃうのに。

慎治 何でマツカワのせいで怒られなあかんかったん。

七織 マツカワのことは、どうでもええけど。…筆箱盗って、悪かったな。

七織 今さら言われても。

慎治 ……七瀬は、自殺と違うやろ。

七織 何であんたにそんなんわかんの。

慎治 佐伯さんと行こうとした。

七織 きれいごとやわ。

慎治 何で。

七織 あの子は、無理に、行くゆうただけや。

慎治 だから、自分で行こう思ってたから。

七織 わかってへんな。どこでもよかってん、誰でも。

慎治 ほんま、何で骨分けてん。あの人のこと、認めたからちゃうんか。

七織 ……

慎治 考えすぎや。

七織 あの子も、祭り、嫌いやった。

慎治 八朔なんか、誰もまともややってない。せいぜい観光客向けや。

七織 わかってるよ。

慎治 こだわってんのは、おまえや。おまえが一番、気にしてんねん。

七織 菊江さんはどうなん。あの人の一生、この家に、祭りに捧げてんねん。

慎治 お手伝いやろ、しようないやんけ。あの人も、ほんまの祭りは知らん。

七織 ほんまの八朔はもつと昔や。みんな、知らんから、追いかけてるだけや。

七織 あほらしい。

慎治 え。

七織 あほらしい祭りのせいで。アタシのお母ちゃんも、おばあちゃんも、病気なつてもうて。

慎治 その代わり、ワタナベの家は、大事にされてる。お金に困らん、でかい家住んで、何でも優遇してもうて。

七織 あたりまえや。人生狂わされてきたんやからなあ。

慎治 村のもんも、昔のことは知らん。あんな祭りあったことも忘れてる。

七織 菊江さん、ゆうとつたわ。八朔は、たぶん今年で最後やて。

慎治 都合悪いことは、なかったことにすんねんな。…スマコさんたちは、

七織 どうなんの。あの人たち、キャバ嬢どころちゃうで。売春でもない、奉仕いうて。何させられてたん。

慎治 スマコさんたちと、おまえは違う。七瀬は、幸せになりたかったんや。

七織 おまえも、幸せになつてええねん。

慎治 あの人たち、苦しんだんは、どんな意味あんの。

七織 意味を見つかるんは、人間や。意味がないんやったら、やめたらええ。

慎治 どうせ人間は、あほやから、また別のものに、意味を見つかるねん。

七織 偉そうに。あんた、そんな賢いん。

慎治 俺、サルやからあほやけど。そやから、人間のことは客観視できんねん。

七織 ああ、そう。

慎治 そうや。

七織 なるほどね。

慎治 サルやったら、あかん。（と、七織に近づく）人間以下やけど。

七織 サル以下の人間もおるで。アタシみたいなん。最悪な、最低な。汚い。

慎治 ずるい。

七織 もういいて。（七織の頬に触れる）

七織 つねっていいよ。

七織 つねっていいよ。

七織 つねっていいよ。

七織 つねっていいよ。

七織 つねっていいよ。

七織 つねっていいよ。

慎治 めっちゃ痛かったわ。
七織 ごめんな。優しくなくて。

慎治、七織の頬に口づけする。
七織、慎治の頬に口づけする。
二人、重なってゆく。

5
明け方になる。

菊江、奥から傘を出して、玄関のほうに持っていく。部屋を行ったり来たりしている。菊江、鼻歌を歌い出す。声が小さく、ことばが聞き取れない。

菊江 ……嘆くウグイスよ……夜来香…花…夜来香恋の花…ああ……。

菊江、徐々に声が大きくなる。

慎治、勝手口のほうから部屋に入ってくる。

慎治 モリヤシキさん、まだ開いてませんでした。

菊江 えー、いつもはよ開けてはるのに。

慎治 何回か、ピンポンしたんですけど。

菊江 あ、そう。まあええわ。

慎治 手伝いましょうか。

菊江 ああ、もう玄関に持って行ったから。

慎治 はい。

菊江 七織様、引き止めてなあ。

慎治 え。

菊江 今日ぐらい、いってもらわんと。

慎治 ……でも仕事あるてゆうてたから。

菊江 そこを説得するんが、あんたの役目やろ。

慎治 はあ。

菊江 七織様が、あんたの子供を産んだら、あんたはヒメ巫女様の父になる

んやで。

慎治 別に、それが目当てで、やったんとは違いますけど。

菊江 あんたとこの、木村の伯母さん、入院してるらしいな。

慎治 はい。

菊江 院長に手回して、入院費も楽にさせてあげるで。ガンの手術やったっけ。したいんやろ。

慎治 ……。

菊江 そいから、和子さん、ヘノマツの人と結婚すんねんて。向こうも思い遣うとこやないけども。あんたかて、妹のために、準備してやりたい、思うやろ。

慎治 あいつは、身一つで行くゆうてます。

菊江 あんた、女心がわからんなあ。嫁に行ったら、何一つ、自由にならんかもしれんねんで。ある程度、お金持たせてあげんと。和子さん、かわいそうやで。

慎治 向こうにも、かわいがってもらってるから。心配はしてないんですけど。

菊江 他人はどこまで行っても、他人やで。和子さんも、そのうち、子供産むやろし。そしたら、ますます身動きとれなくなる。もうちよっと、こっちから氣遣ってあげんと。

慎治 はあ。

菊江 和子さんには、アタシからも、お祝い包ませてもらうしな。

七織、部屋に入ってくる。急須を持っている。

菊江 あ、すんませんな。起きてはりました。

七織 ナミさんは、起きてる。アキツさんは、起きてるか寝てるか、わからん。

菊江 そら、寝てるてことですわ。(と、急須を受け取り奥に持っていく)

ホットケーキ、まだですねん。モリヤシキさんが開いてないんで。

七織 ええよ、別に。

菊江 七織様。せつかくやし、慎治さんもおることやし、もう一泊、二泊しはったら。

七織 ……。

菊江 慎治さんも、こう見えて、寂しがりやですわ。なあ。

慎治 ……。

菊江 ちよっと、広間、さっと、掃いてきますわ。(慎治に) ようお話ししてな。

菊江、部屋から出ていく。

七織 ファジャ、結婚すんの。

慎治 え、うん。…聞いてた。

七織 聞こえた。おめでどう。よかったな。

慎治 ありがとう。

七織 何個下やったつけ。

慎治 二つ下。

七織 ああ。そうか、あの子もそんななるんか。あんたと違くて、かわいいてよかったな。

慎治 うん、女の子やしな。

七織 期待せんほうがええで。

慎治 え。

七織 アタシ、できにくい体質みたいやから。

慎治 ああ、いや。菊江さんは、冗談で。

七織 今までも、中出しされても、妊娠したこと一回もないもん。そうゆう体質なんやろな。

慎治 そう。

七織 安心した。がっかりした。

慎治 ……行くの。

七織 行くよ。

慎治 送ってくわ。

七織 (玄関のほうを指し) 手伝わんでええの。

慎治 俺なんか抜けてもええ。…おまえが戻るつもりないんやったら、俺が、ここ出てもかまへんし。

七織 ファジャはどうなんの。

慎治 あいつは、嫁行く。もう大人やし、俺がおらんくても、やっていける。

七織 ふーん。

慎治 俺、何でもするわ。肉体労働もオーケーや。ラーメン屋とか、コンビニで、バイトとかでも。何でも。

七織 あんたみたいなん、トウキョウに合わん。

慎治 そら、おまえには、稼ぎも負けるやろけど。やってたら、金も貯めてちやんとするから。おまえには心配かけへん。

七織 いつのまに、アタシと一緒に前提なってるんの。厚かましいなあ。

慎治 いや。違うとこに住んでもええけど。

七織 アタシが戻らんかったら、こんな展開なってるないやろ。アタシを探しに來たりせえへんかったもんな。今まで。

慎治 え…それは。

七織 その程度のもんや。今、盛り上がってるだけや。

慎治 俺やったらあかんのか。

七織 ……。

慎治 そりやそうか。俺と一緒になったら、迷惑かけるもんな。菊江さんも、籍入れるゆうたら、反対するやろな。

七織 そういうことゆうてるんちやう。

慎治 ワタナベのヒメさんは、結婚せえへんし。

七織 関係ないやろ。

慎治 それやったら、何が関係あんねん。

間。

奥から、菊江の声が聞こえる。

菊江 慎治さんー。ちよつとー。

慎治 ……。

七織 呼んでんで。

慎治 ……。

菊江 ちよつとー。電気、掃除、手伝ってください。

七織 電気やて。

慎治 ……。

七織 菊江さん、高いとこ、苦手やねん。手伝ってあげたら。

慎治 ……勝手に、行ったらあかんで。

七織 わかった。

菊江 慎治さん。はよー。

慎治 はーい。

慎治、部屋から出ていく。

七織、慎治の後姿をしばらく見つけている。離れのほうに部屋から出ていく。しばらくして、部屋に入ってくる。小さな鞆を持っている。鞆から、茶色い封筒を出す。テーブルの上に、封筒を置く。部屋から出ていこうとして、鞆から、折りたたみの傘を出す。傘を床の上に捨てる。勝手口のほうに部屋から出てい

く。
しばらくして、慎治、部屋に入ってくる。雑巾を持つている。七織がいないことに気づき、茶色い封筒が目に入る。封筒の中を見る。床に捨てられた傘を手取る。七織を探すがいない。封筒と傘を置いて、すぐに、部屋から出ていく。うとする。広間のほうに行きかけて、すぐに勝手口のほうに部屋から出ていく。「ごめんください」と、奥から、明るい奇妙な声が聞こえる。ときどき、女の笑い声が聞こえる。

終